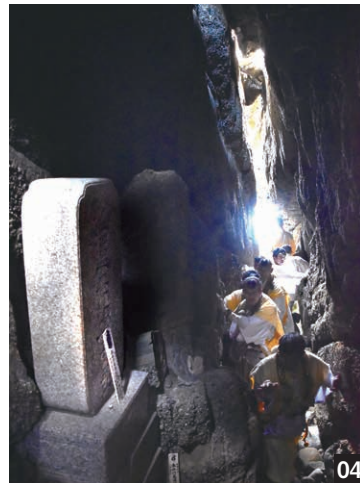


葛城修験。それは、和歌山の海から始まる日本最古の修験の道

漁や農耕など日々の生活を通じて、自然と深い関わりを持ちながら生きてきた日本人。豊かな自然の恵みに感謝し、また脅威や神秘性に対面しては畏怖を抱いてきた。そうした自然崇拜は、一木一草にいたるまで神仏が宿るという日本独自の山岳信仰となる。そして今からおよそ1400年前の飛鳥時代。『役行者を開祖とする』修験道が、和歌山と大阪・奈良に広がる葛城の山中で誕生する。『修験道』とは、山に籠もり厳しい修行を行うことで悟りを得る宗教で、山岳信仰を中心に神道や仏教(密教)だけでなく民間信仰までもが習合された極めて稀なものだった。

『役行者』が生まれ故郷近くである葛城山中で修行を始めたのが18歳の頃といわれている。その後、行者により法華経が埋納されたという28の経塚をはじめ、滝や巨石、寺社や祠などを巡る修行とその行場を総称して『葛城修験』と呼ぶ。さらに『葛城修験』は、世界遺産である吉野・大峯と並ぶ『修験の二大聖地』とされる。その後、行者により法華経が埋納されたという28の経塚をはじめ、滝や巨石、寺社や祠などを巡る修行とその行場を総称して『葛城修験』と呼ぶ。さらに『葛城修験』は、世界遺産である吉野・大峯と並ぶ『修験の二大聖地』とされる。



その後、行者により法華経が埋納されたという28の経塚をはじめ、滝や巨石、寺社や祠などを巡る修行とその行場を総称して『葛城修験』と呼ぶ。さらに『葛城修験』は、世界遺産である吉野・大峯と並ぶ『修験の二大聖地』とされる。

れ、修験者たちにとって最も重要な行場であり、必ず修行しなければならぬ聖地とされている。その行程は葛城山脈を伝うように112kmにも及び、日本最大の断層である中央構造線に重なる。そこは荒々しくも地球のエネルギーに満ちたエリア。自然崇拜を源のひとつとする修験道がここを神聖な場所としたことも容易に納得できる。

山岳修行を行う『修験道』には珍しく、『葛城修験』は和歌山市・加太沖、紀淡海峡に浮かぶ虎島の『序品窟』を始まりとする。虎島は友ヶ島を構成する四島のうちのひとつで『序品窟』は、その南端にひっそりと口を開けている狭い岩穴。頭をぶつけそうになりながら中に入ると『妙法蓮華経序品第一』と彫られた石碑があり、その前で修験者たちは経をあげ、碑伝を傍らに置いていく。そして岩穴内に反響する波の音に促されるように先に進み、反対側の岩穴から水面輝く外へと出る。それは修験の始まりであり、人生をなぞる擬死再生のセレモニーのようでもある。

かつらぎ



01



修験とは、全ての多様性を認める日本人の心が生み出した宗教

Special Interview

【那智山青岸渡寺副住職 ● 高木亮英】

明治元年に神仏分離令が出され、明治5年に修験道は禁止されましたが、日本人の信仰心まで禁止することはできませんでした。我々の家には神棚もあれば仏壇もあります。世界を見渡すと宗教の違いにより様々な争いが起きていますが、日本ではそういった争いは起きていません。修験道の誕生はお互いを認め合う、日本人の寛容性や多様性があるからこそだと思います。修験道復活のために、昭和63年から熊野修験を、平成6年から葛城修験を再開しましたが、どちらもその行程は非常に過酷で大変な修行です。参加者の中には2度と来るもんか!、といった人もいますが、そんな人ほど思いは強く、何度も来られます。山に入って死ぬほどの思いをしながらも、修行を終えると生き返る。それこそが擬死再生であると考えます。大自然の中では全ての人の存在は平等なんです。修験道とは理論理屈より実践や体験を大切にしています。自然の中で人間性を取り戻すこと。それは仏性を得るということです。

01>加太沖合に浮かぶ虎島。地ノ島や神島、沖ノ島も含め友ヶ島という。画面中央下部に観念窟がありその上部に五所の額、左端に序品窟がある。02>加太・北の浜で行われた採燈大護摩供。03>虎島の断崖絶壁に刻まれた『五所の額』。紀州初代藩主の徳川頼宣の命により、江戸時代の儒者である李梅溪(りばいけい)が島内にある5つの行場名を刻んだもの。04>葛城修験の始まりの地、序品窟。見逃してしまうほどその入り口は狭い。



03



02